

荻野恭茂氏蔵『伊勢物語』

— 翻 刻 (上) —

西 純 子

この写本は先に荻野恭茂氏が「架蔵本『伊勢物語』」^(金)について紹介されたものであり、書誌については同論文に詳しく書かれているが、翻刻の前に簡単に書誌形態を記しておく。

氏の説によると、本書は古写本で大きさは縦二四・八センチ、横一七・八センチ。胡蝶装一冊であり、張数はすべて八〇枚、うち墨付七五枚。料紙は鳥の子。表紙、裏表紙は紺地で、上に金泥で風景が描かれており、表紙の左肩に題簽の貼ってあったと思われる跡が残る。筆者は本文、奥書、勘物を通じて一筆らしいが、ところどころにそれとは別筆の朱の書き入れがある。本文の書写年代は、紙質・墨跡・語句等からみて、室町時代末期の頃かと思われる、とのことである。

本書の翻刻を御許可くださり、またいろいろと御教示くださいました、荻野恭茂先生、梅野さみ子先生にはここに記して、深く感謝の意を捧げます。

注

1 荻野恭茂氏「架蔵本『伊勢物語』について」(『松村博司先生古稀記念 国語国文学論集』笠間書院 昭54・11)

凡 例

一、本稿は、荻野恭茂氏蔵『伊勢物語』の翻刻である。
一、翻刻にあたっては、漢字、仮名等、すべて原本の通りを原則とし、くり返し記号「ヽ」「ヾ」「ヿ」「ヾ」もそのままにした。ただし、漢字の異体字、旧字は、現在の通行体に改

めた。

一、改行は原本通りである。

一、書き込みの位置は出来るかぎり原本に忠実に従った。

一、補入記号のある補入が一例みられるが、その部分は「 \wedge 」に入れて示した。

一、朱筆の書き入れは（ ）の中に入れ、これを示した。ただし、朱筆の合点については、それを示さない。

一、判読できない文字は□で示した。

一、原本の状態について説明を要する場合は、その箇所※の符号を施し巻末に説明をした。

一、誤字、脱字、衍字等、本文に疑問のある場合には、右傍に

「ママ」と注記した。

一、本文の上に段数を、本文の下の（ ）内に墨付の丁数を施した。

1 むかしおとこ（有）うるかうふりしてならの京かす

かの里に（有）しるよししてかりにいにけりそのさと

いとなまめいたる女はらからすみけりこの

おとこかいま見てけりおもほえずふるさとに

いとはしたなくてありければ心ちまとひにけり

男のきたりけるかりきぬのすそをきりてうた

をかきてやるそのおとこしのふすりのかりき

ぬをなむきたりける

（新七）

かすか野のわかむらさきのすりころも

しのふのみたれかきりしられす

（1ウ）

となむをいつきていひやりけるついでおもしろ

きことゝもやおもひけむ

古今河原大臣歌也在大臣源融寛平七年八月廿五日癸七十三

みちのくの忍ふもちすり誰ゆへに

みたれそめにしわれならなくに

といふうたの心はへなりむかし人はかくいち

はやきみやひをなんしける

2 むかしおとこありけりならの京ははなれこの京

は人の家またさたまらさりける時に西の

京（三）に女ありけりその女世人にはまされりけり

その人かたちよりは心なむまさりたりける

（2オ）

ひとりのみもあらさりけらしそれをかのみお

とこうちものかたらひてかへりきていかゝおもひけん

時はやよひのついたり雨そほふるにやりける

おきもせずねもせてよるを明しては

春のものとてなかくくらしつ

3 むかしおとこありけりけさうしける女のもと

にひしきもといふ物をやるとて

おもひあらはむくらの宿にねもしなん

ひしきものには袖をしつゝも

二条の後のまた御門にもつかうまつり給はて

(2ウ)

たゝ人にておはしましける時のことなり

4 むかし東の五条におほきさいの宮おはしまし

けるにしのたいにすむ人ありけりそれをほいに

はあらて心さしふかゝりける人行とふらひけるを

む月の十日はかりのほとにほかにかくれにけり

あり所はきけと人のゆきかよふへき所にもあら

さりければなをうしとおもひつゝなんありける又

のとしのむ月に梅のはなさかりにこそをこひ

ていきてたちて見ゑて見ゝれとこそにけるへ

くもあらすうちなきてあはらなるいたしきに

(3オ)

月のかたふくまでふせりてこそを思ひ出てよめる

(5ウ) 月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

わか身ひとつはもとの身にして

とよみて夜のほのくくとあくるになくく

かへりにけり

5 むかしおとこありけりひんかしの五条わたりにいと

しのひていきけりみそかなるところなればかとよ

りもえいらてわらはへのふみあけたるついひちの

くつれよりかよひけり人しけくもあらねとたひ

かざなりければあるしきゝつけてそのかよひ

(3ウ)

ちに夜ことに人をすへてまもらせければいけ

ともえあはてかへりけりさてよめる

人しれぬわかかよひちのせきもりは

よひくことにうちもねなん

とよめりければいといたうこゝろやみけり

あるしゆるしてけり二条のきさきにしのひ

てまいりけるを世のきこえありければせうと

たちのまもらせ給ひけるとそ

6 むかしおとこありけりをんなのえうましかり

けるをとしをへてよはひわたりけるをからう

(4オ)

してぬすみ出ていとくらきにきけりあくた河

といふかはをいていきければ草のうへにをき

たりける露をかれはなにそとなんおとこに

とひける行ききおほく夜もふけにければ

をにある所ともしらて神さへいといみしうなり

雨もいたうふりければあはらなるくらに女をは

おくにをしいれておとこゆみやなくひをおひて
とくちにをりはや夜もあけなむとおもひつゝ
ゐたりけるににはやひとくちにくひてけり
あなやといひけれと神なりきはきにえきか

(4ウ)

さりけりやう／＼夜もあけゆくに見れはいてこし

女もなしあしすりをしてなけともかひなし

(新吉)

しら玉かなにそと人のとひしとき

露とこたへてきえなましもの

高千穂元正月為中宮卅六

これは二条のきさきのいとこの女御の御もと

につかうまつるやうにてゐ給へりけるをかちのいと

めてたくおはしければぬすみておひて出たりけるを

御せうとほりかはのおとゝたらうくにつねの

大なこんまた下らうにて内へまいり給ふにいみしう

なく人あるをきゝつけてとゝめてとりかへしたまふ

(5オ)

てけりそれをかくをにとはいふなりけりまたいと

わかうてきさきのたゝにおはしけるとときとかや

7むかしおとこありけり京にありわひてあつまにい

きけるに伊勢おはりのあはひのうみつらをゆ

くになみのいとしろくたつを見て

(後)
いとゝしくすきゆくかたのこひしきに

うらやましくもかへるなみかな

となむよめりける

8むかしおとこありけり京やすみうかりけんあつま

のかたにゆきてすみ所もとむとともと

(5ウ)

する人ひとりふたりしてゆきけりしなのゝくに

あさまのたけにけふりのたつを見て

(新吉)

しなのなるあさまのたけにたつつけふり

をちこち人のみやはとかめぬ

9むかしおとこありけりそのおとこ身をえうなき

ものに思ひなして京にはあらしあつまのかたに

すむへきくにもとめにとてゆきけりもとより

ともとする人ひとりふたりしていきけり道しれる

人もなくてまとひいきけり三河の国やつはしと

いふ所にいたりぬそこをやつはしといひけるは水行

(6オ)

河のくもてなれははしをやつわたせるによりて

なむやつはしといひけるその沢のほとりの木の

かけにおりゐてかれないひくひけりその沢に杜若い

とおもしろくききたりそれを見てある人のいはく

かきつはたといふもしをくのかみにすへてたひ

のこゝろをよめといひければよめる

から衣きつゝなれにしつましあれは

はる／＼きぬるたひをしそおもふ

とよめりければみな人かれいひのうへになみた

おとしてほとひにけり

(6ウ)

ゆき／＼てするかの国にいたりぬうつ山にいたり

てわかいらんとするみちはいとくらうほそきにつ

たかえてはしけり物心ほそくすゝなるめをみる

ことと思ふにす行者あひたりかゝる道はいかてか

いまするといふを見れば見し人なりけり京に

(新古) その人の御もとにふみかきてつく

するかなるうつ山辺のうつゝにも

夢にも人にあはぬなりけり

ふしの山を見ればさ月のつこもりに雪いと

しろうふれり

(7オ)

(新古) 時しらぬ山はふしのねいつとてか

かのこまたらに雪のふるらむ

その山はこゝにたとへはひえの山をはたち
或説云塩尻壺ト云物アリ其尻此山ニ似タリ此物語語故新詞寂遠殊信用此説
はかりかさねあけたらんほとしてなりはしほ

或説はしりほしの先人命縦雖塩事凡卑也不可用之心エストテアリナン往年
しりのやうになんありける猶ゆき／＼てむさしの
有尋問人答體不知由云々

国としもつふさのくにとのなかにいとおほきなる

河ありそれをすみた川といふその川のほとり

にむれあて思ひやれはかきりなくとをくも

きにけるかなとわひあへるにわたしもりはや

ふねにのれ日もくれぬといふにのりてわたらん

とするにみな人物わひしくて京に思ふ人なき

にしもあらずさるおりしもしるき鳥のはしと

あしとあかきしぎのおほきさなる水のうへにあそ

ひつゝいをくふ京には見えぬ鳥なればみ名人

見しらすわたしもりにとひければこれなん宮

こ鳥といふをきゝて

(古) 名にしおはゝいさことゝはんみやことり

わか思ふ人はありやなしやと

とよめりければふねこそりてなきにけり

10 むかしおとこむさしの国までまとひありきけり

(8オ)

さてそのくにゝある女をよはひけりちゝはこと人に

あはせむといひけるをゝなんあてなる人人心

つけたりけるちゝはなを人にてはゝなん藤原
なりけるさてなむあてなる人にとおもひける
このむこかねよみてをこせたりけるすむ所
なんむさしの国いるまのこほりみよしのゝ里なりける

みよしのゝたのむのかりもひたふるに

君かかたにそよるとなくなる

むこかねかへし

我かたによるとなくなるみよし野の

(8ウ)

たのむのかりをいつかわすれむ

となん人のくにゝてもなをかゝることなむ

やまさりける

11 むかしおとこあつまへゆきけるにともたちとも

に道よりいひおこせける

わするなよほとは雲ゐになりぬとも

(拾遺) 空行月のめぐりあふまて

(三)

12 むかしおとこありけり人のむすめをぬすみて

むさし野へいてゆくほとにぬす人なりければ

くにかみからめられにけり女をは草むら

(9オ)

の中にきてにけにけりみちくる人この野はぬす

人あんなりとて火つげんとすをんなわひて
(古カスカ) むさし野はけふはなやきそ若草の

つまもこもれりわれもこもれり

とよみけるをきゝて女をはとりてともに

いていにけり

(四)

13 むかしむさしなるおとこ京なる女のもとにきこゆ

れははつかしきこえねはくるしとかきてうは

かきにむさしあふみとかきてをこせてのちを

ともせずなりにければ京よりをんな

(9ウ)

むさしあふみさすかにかけてたのむには

とはぬもつらしとふもうるさし

とあるを見てなむたへかたき心ちしける

とへはいふとはねはうらむむさしあふみ

かゝるおりにや人はしぬらむ

14 むかし男みちのくにゝすゝろに行いたり

けりそこなる女京の人はめつらかにやおほえ

けんせちにおもへる心なむありけるさてかの女

中へに恋にしなすは桑子にそ

なるへかりける玉のをはかり

(10オ)

うたさへそひなひたりけるさすかにあはれと
やおもひけむいきてねにけり夜ふかくいてに
ければ女

夜もあけはきつにはめなてくたかけの
またきになきてせなをやりつる
といへるにおとこ京へなむまかるとて

くりはらのあれはねイの松の人ならば
都のつとにいさといはましを

といへりければよろこほひておもひけらしとそ
いひをりける

(10ウ)

15 むかしみちのくにゝてなてうことなき人のめに
かよひけるにあやしうさやうにてあるへき女
ともあらず見えければ

(新勅)

しのふ山忍ひてかよふみちもかな

人のこゝろのおくも見るへく

女かきりなくめてたしと思へとさるさかなき

えひす心を見てはいかゝせんは

紀有常従四位下雅楽頭経兵衛尉藏人左近将監左馬助兵衛佐左少将少納言刑部大輔
16 むかしきのありつねといふ人ありけりみよのみかと

自承和至十元慶正下右虎男

につかうまつりてときにあひけれとのちは世かは

り時うつりにければよのつねの人のこともあら

(11オ)

す人からは心うつくしくライあてはかなることをこ
のみてこと人にもすまつしくへてもなをむかし
よかりし時の心なからよのつねのこともしらす
としころあひなれたるめやう／＼とこはなれて
つるにあまになりてあねのさきたちてなりたる
所へゆくをおとこまことにむつまじきことこそ
なかりけれ今はとゆくをいとあはれと思けれと
まつしければするわさもなかりけりおもひわひ
てねんころにあひかたらひけるともたちのもと
にかう／＼いまはとてまかるをなにもいさゝか

(11ウ)

なることもえせてつかはすことゝかきておくに

手をおりてあひ見しことをかそふれば

とをといひつゝよつはへにけり

かのともたちこれを見ていとあはれと思ひ

てよるのものまでをくりてよめる

としたにもとをとてよつはへにけるを

いくたひ君をたのみきらぬらむ

かくいひやりたりければ

これやこのあまのはころもむへしこそ

君かみけしとたてまつりけれ

(12オ)

よろこひにたへて又

秋やくる露やまかふと思ふまで

あるはなみたのふるそありける

17としころをとつれさりける人のさくらのさかり

にみにきたりければあるし

あたなりと名にこそたてれさくらほな

としにまれなる人もまちけり

返し

けふこそすはあすは雪とそふりなまし

きえすはありとも花と見ましや

(12ウ)

18むかしなま心ある女ありけりおとこちかうあり

けり女うたよむ人なりければこゝろみんとて

さくの花のうつろへるをおりておとこのもと

へやる

くれなるにほふはいつらしら雪の

えたもとをゝにふるかとも見ゆ

おとこしらすよみによみける

くれなるにほふかうへのしらさくは

おりける人のそてかとも見ゆ

19むかしおとこみやつかへしける女のかたにこたちな

(13オ)

りける人をあひしりたりけるほともなくかれ

にけりおなし所なれば女のめには見ゆる物から

おとこはあるものかとも思ひたえすをんな

あま雲のよそにも人のなりゆくか

さすかにめには見ゆるものから

とよめりければおとこ返し

あまくものよそにのみしてふることは

わかある山のかせはやみなり

とよめりけるは又おとこある人となんいひける

20むかし男やまとにある女を見てよはひて

(13ウ)

あひにけりさてほとへて宮つかへする

人なりければかへりくるみちにやよひはかり

にかえてのもみちのいとおもしろきをおりて

女のもとに道よりいひやる

君かためたおれる枝は春なから

かくこそ秋の紅葉しにけれ

とてやりたりければ返事は京にきつき

てなんもてきたりける

いつのまにうつろふ色のつきぬらん

君かざとには春なかるらし

(14オ)

21 小 むかしおとこ女(小)いとかしこくおもひかはしてこと

心なかりけりさるをいかなることかありけんい

さゝかなることにつけてよの中をうしと思

ていてゝいなんと思ひてかゝるうたをなむよみ

てものかきつけける

出ていなは心かるしといひやせむ

世のありさまを人はしらねは

とよみをきていてゝいにけりこの女かくかきをき

たるをけしう心をくへきこともおほえぬを

ななゝよりてかかゝらんといいたうなきていつ

(14ウ)

かたにもとめゆかんとかとに出てとみかうみゝ

けれといつこをはかりともおほえざりければ

かへりいりて

思ふかひなき世なりけりとし月を

あたに契りてわれやすまひし

といひてなかめをり

新勅 人はいさおもひやすらん玉かつら

おもかけにのみいと見えつゝ

この女いと久しくありてねむしわひてにやあり

けむいひをこせたる

(15オ)

いまはとてわするゝ草のたねをたに

人のこゝろにまかせすもかな

返し

新勅 返す わすれくさうふとたにきく物ならば

おもひけりとはしりもしなまし

又 又 ありしよりけにいひかはしておとこ

新勅 返す わするらんと思ふ心のうたかひに

ありしよりけに物そかなしき

返し

なか空にたちゐる雲の跡もなく

(15ウ)

身のはかなくもなりにけるかな

とはいひけれとをのか世ゝになりにければ

うとくなりにけり

22 小 むかしはかなくてたえにけるなかなをやわ

すれざりけむ女(案内)のもとより

うきなから人をはえしもわすれねは

かつうらみつゝなをそこひしき

といへりければされはよといひておとこ

あひみては心ひとつをかはしまの

水のなかれてたえしと思ふ

(16オ)

とはいひけれとその夜いにけりいにしへ行き
きのことゝもなといひて

秋の夜の千よをひとよになすらへて

やちよしねはやあく時のあらん

返し

秋の夜のちよを一夜になせりと

ことはのこりて鳥やなきなむ

いにしへよりもあはれにてなんかよひける

23 むかしゐなかわたらひしける人のこともあのも

とに出てあそひけるをおとなになりにければ

(16ウ)

おとこも女もはちかはしてありければ男はこの

女をこそえめと思ふ女(有)はこの男をとおもひ

つゝおやのあはずれともきかてなむありけるさ

て此となりのおとこのもとよりかくなん

つゝゐつの井つゝにかけしまろかたけ

すきにけらしなれもみさるまに

女返し

くらへこしふりわけかみもかたすぎぬ

君ならずしてたれかあくへき

なといひくゝてつゐにほいのことくあひにけり

(17オ)

さてとしころふるほとに女おやなくたよりなく

なるまゝにもろともにいふかひなくてあらんやは

とてかうちのくにたかやすのこほりにいきかよ

ふ所いてきにけりさりけれとこのもとの女あし

と思へるけしきもなくていたしやりければ

男こと心ありてかゝるにやあらむと思ひうた

かひてせんさいのなかにかくれるてかうちへいぬる

かほにて見ればこの女いとうようけさうして

うちなかめて

(吉風ふけはおきつしらなみたつた山

(17ウ)

夜半にや君かひとりこゆらん

とよみけるをきゝてかきりなくかなしとおもひ

てかうちへもいかすなりにけりまれ／＼かの

たかやすにきてみればはしめこそこゝろにゝ

くゝもつくりけれいまはうちとけて手つから
いゝかひとりとてけこのうつは物にもりけるをみ
て心うかりていかすなりにけりさりければ

〔新吉〕

きみかあたりみつゝをゝらん伊駒やま
くもなかくしそ雨はふるとも

〔18オ〕

といひてみいたすにからうしてやまとひとこん
といへりよろこひてまつたひゝ過ぬれば

〔新吉〕

君こむといひし夜ことにすぎぬれば
たのまぬものゝこひつゝそふる

といひけれとおとこすますなりにけり

〔口〕^ハ※¹

24 むかし男かたゐなかにすみけり男宮つかへし
にとてわかれおしみてゆきにけるまゝに三とせ
こさりければまちわひたりけるにいとねんころ
にいひける人にこよひあはんとちきりたり
けるにこの男きたりこのとあけたまへと

〔18ウ〕

たゝきけれとあけてうたをなんよみていたし
たりける

あら玉のとしのみとせをまちわひて

たゝこよひこそにゐまくらすれ
といひいたしたりければ

あつさ弓まゆみつきゆみとしをへて

わかせしかことうるはしみせよ

といひていなんとしければ女

あつさ弓ひけとひかねとむかしより

こゝろは君によりにしものを

〔19オ〕

といひけれとおとこかへりにけり女いとかなし
くてしりにたちてをひゆけとえをひつかて

し水のある所にふしにけりそこなりけるいは

におよひのちしてかきつけける

あひおもはてかれぬる人をとゝめかね

わか身はいまそきえはてぬめる

とかきてそこにいたつらになりけり

25 むかしおとこありけりあはしともいはさりけ
るをんなのさすかなりけるかもとにいひやり
ける

〔19ウ〕

〔吉〕秋の野にさゝわけしあぎの袖よりも

あはてぬるよそひちまさりける

色小このみなる女かへし

(吉) みるめなき我身をうらとしらねはや

かれなてあまのあしたゆくくる

26 むかし男五條わたりなりける女をえゝすなりにけることゝわひたりける人の返事に

おもほえず袖にみなどのさはくかな

もろこしふねのよりしはかりに

27 むかしおとこ女のもとに一夜いきて又もいかす

(同)

(20オ)

なりにければ女のであらふ所にぬきすをうち

やりてたらひのかけに見えけるをみつから

われはかり物思ふ人はまたもあらしと

おもへは水のしたにもありけり

とよむをこさりけるおとこたちきゝて

みなくちに我や見ゆらむかはつさへ

水のしたにてもろこゑになく

28 昔いろこのみなりける女いてゝいにければ

なとてかくあふこかたみになりにけん

水もらさしとむすひしものを

(20ウ)

29 むかし春宮の女御の御かたのはなの賀にめし

(三)

(貞観七三—照宣公家)

貞観十二年二月 陽成院 皇太子三子時高子后 為女御依春宮母儀号也去年十二月廿六日誕生高子年廿七

あつけられたりけるに

(新古)

花にあかぬなけきはいつもせしかとも

けふの今宵ににる時はなし

30 むかしおとこはつかなりける女のもとに

(新勅)

あふことはたまのをはかりおもほえて

つらき心のなかく見ゆらむ

31 昔みやのうちにてあるこたちの御つほねの

まへをわたるになにをあたにしか思ひけん

よしや草はにならむさかみんといふをおとこ

(21オ)

つみもなき人をうけへはわすれ草

をのかうへにそおふといふなる

といふをねたむ女もありけり

32 むかしものいひける女にとしころありて

(吉) いにしへのしつのをたまきくりかへし

むかしをいまになすよしもかな

といへりけれとなにとおもほはずありけむ

33 むかしおとこつづくにむはらのこほりにかよ

ひける女(有)このたひいきては又こしとおもへる

けしきなればおとこ

(21ウ)

(上旬万葉)

あしへよりみちくるしほのいやましに

きみにこゝろをおもひますかな

返し

(万葉)

こもり江におもふ心をいかてかは
舟さすさほのさしてしるへき

みなか人のことにてはよしやあしや

34 昔おとこつれなかりける人のもとに

(四)

いへはえにいはねはむねにさはかれて

こゝろひとつになけくころかな

おもなくていへるなるへし

(22オ)

35 むかし心にもあらたえたる人のもとに

たまのをゝあはおによりてむすへれば

たえてのゝちもあはむとそおもふ

36 昔わすれぬるなめりとゝひことしける女

(四)

もとに

たにせはみみねまではへる玉かつら

たえむと人にわかおもはなくに

37 むかしおとこいろ(小)このみなりける女にあへりけり

うしろめたくやおもひけむ

我ならてしたひもとくるあさかほの

(22ウ)

ゆふかけまたぬ花にはありとも

返し

ふたりしてむすひしひもをひとりして

あひみるまてはとかしと思ふ

38 むかし紀の有つねかりにいきたるにありきて

をそくきけるによみてやりける

きみによりおもひならひぬ世の中の

人はこれをやこひといふらむ

返し

ならばねは世の人ことになにかをかも

(23オ)

恋とはいふとゝひしわれしも

39 むかしさいゐんのみかとゝ申すみかとおはしまし

淳和天皇

けりそのみかとのみこたかいこと申すいまそ

第六皇子崇子内親王母橘船子正四上清野女第一承和十五五月十五日薨

かりけりそのみこうせたまひておほむはぶりの

夜その宮のとなりなりけるおとこ御はふりみむ

とて女くるまにあひのりていたりけりいとひさ

しうゐていてたてまいらすうちなきてやみぬへ

(融三代集)

かりけるあひたにあめのしたのいろこのみ源のい

たるといふ人これもこの見るにこの車を女くるま

とみてよりきてとかくなまめくあひたにかのいたる

(23ウ)

ほたるをとりにて女の車にいれたりけるをくるま
なりける人このほたるのともす火にやみゆらむ
ともしけちなむするとのれるおとこのよめる

いて、いなはかきりなるへきともしけち

年へぬるかとなくこゑをきけ

かのいたるかへし

いとあはれなくそきこゆるともしけち

きゆる物とも我はしらすな

あめのしたのいろこのみのうたにては猶そ有ける

いたるはしたかふかおほち也みこのほいなし

(24オ)

40むかしわかきおとこけしうはあらぬ女を思ひ

けりさかしらするおやありておもひもそつく

とてこの女をほかへをひやらむとすさこそいへい

またをいやらす人のこなればまた心いきおひなかり

ければとむるいきおひなし女もいやしければ

すまふちからなしさるあひたにおもひはいや

まさりにまさるにはかにおやこの女をひうつ

おとちのなみたをなかせともとむるよしなし

ゐていて、いぬおとこなくよめる

いて、いなはたれかわかれのかたからむ

(24ウ)

ありしにまさるけふはかなしも

とよみてたえいりにけりおやあはてにけりなを

思ひてこそいひしかいとかくしもあらしとおもふに

しんしちにたえいりにければまとひて願たて

けりけふのいりあひはかりにたえいりて又の

日いぬの時はかりになむからうしていきてたり

けるむかしのわか人はさるすける物おもひをなん

しけるいまのおきなまさにしなむや

41昔女はらからふたりありけりひとりはいやし

きおとこのまつしきひとりあてなるおとこもた

(25オ)

りけりいやしきおとこもたるしはずのつこもり

にうへのきぬをあらひて、つからはりけり心

さしはいたしけれとさるいやしきわさもならは

さりければうへのきぬのかたをはりやりてけり

せんかたもなくたななきになきけりこれをか

のあてなるおとこき、ていと心くるしかりけれ

はいときよらなるろうさうのうへのきぬを

みいて、やるとて

むらさきの色き時はめもはるに

のなる草木そわかれさりける

むさしの、こゝろなるへし

(25ウ)

42 昔おとこいろこのみとしる、女(小)をあひいへり

けりされとにくゝはたあらさりけりしは、い

きけれと猶いとうしるめたくざりとていかてはた

えあるましかりけりなをはたてマあらさりける

なかなりければふつか三日許さはることありて

えいかてかくなむ

いて、こしあとたにいまたかはらしを

たかかよひちといまはなるらむ

ものうたかはしぎによめるなりけり

(26オ)

43 むかしかやのみこと申すみこおはしましけり

賀陽親王桓武第七皇子母夫人多治比氏三品治部卿貞観十三年十月八日薨七十八

そのみこ女(伊)をおほしめしていとかしこくめくみつ

かう給けるを人なまめきてありけるをわれのみ

と思けるを又一人きゝつけてふみやるほとゝ

きすのかたをかきて

ほとゝきすななくさとのあまたあれは

猶うとまれぬおもふものから

といへりこの女けしきをととりて

名のみたつしてのたおさはけきそなく

いほりあまたとうとまれぬれは

(26ウ)

時はさ月になむありけるおとこ返し

いほりおほきしてのたおさは猶たのむ

わかすむさとにこゑしたえすは

44 むかしあかたへゆく人(有申)にむまのはなむけせん

とてよひてうとき人にしあらさりければいゑ

とうしさか月さゝせて女のさうそくかつけむと

すあるしのおとこうたよみてものこしにゆひ

つけさす

いて、ゆくきみかためにとぬきつれば

我さへも(兼)ななくなりぬへきかな

(27オ)

このうたはあるかなかにおもしろければ心とゝ
めてよますはらにあちはひて

45 むかしおとこありけり人(西三)のむすめのかしつくい

かてこのおとこにもいはむと思けりうちいてむ

ことかたくやありけむ物やみになりてしぬへき

ときにかくこそ思ひしかといひけるをおやきゝ

つけてなく／＼つけたりければまとひきたり
けれとしにければつれ／＼ともりをりけり時は
(元三)
みな月のつこもりいとあつきころをひによろ
はあそひをりて夜ふけてやゝすゝしきかせ

ふきけりほたるたかうとひあかるこのおとこ
身ふせりて

(27ウ)

ゆくほたる雲のうへまでいぬへくは
秋風ふくとかりにつけこせ

くれかたき夏の日くらしなかわれは
そのことゝなくものそかなしき

46 むかしおとこいとうるはしき(有)もありけりかた
時さらすあひおもひけるを人のくにへいきける
をいとあはれと思てわかれにけり月日へて
をこせたるふみにあさましくえたいめん

(28オ)

せて月日のへにけることわすれやしたまひに
けむといたくおもひわひてなむ菊侍アヅ世中の人
の心はめかるればわすれぬへきものにこそあめれ
といへりければよみてやる

めかるともおもほえなくにわすらるゝ

時しなければおもかけにたつ
47 むかしおとこねむころにかてと思女ありけり
されとこのおとこをあたなりときゝつれな
さのまさりつゝいへる

おほぬさのひくてあまたになりぬれは

(28ウ)

おもへとえこそたのまさりけれ
返しおとこ

おほぬさと名にこそたてれなかれても

つるによるせはありといふものを

48 むかしおとこありけりむまのはなむけせむ
とて人(平定)をまちけるにこそりければ

いまそしるくるしき物と人またむ

さとをはかれすとふへかりけり

49 むかしおとこいもうとのいとおかしけなり
けるを見をりて

(29オ)

うらわかみねよけに見ゆるわか草を
人のむすはんことをしそ思ふ
ときこえけり返し

はつ草のなとめつらしきことの葉そ

うらなくものをおもひけるかな

50 むかしおとこ有けりうらむる人をうらみて

とりのこをとをつくとをはかさぬとも

おもはぬ人をおもふものかは

といへりければ

あさつゆはきえのこりてもありぬへし

(29ウ)

たれかこのよをたのみはつへき

又おとこ

ふく風にこそそのさくらはちらすとも

あなたのみかた人のこころは

又女返し

ゆく水にかすかくよりもはかなきは

おもはぬ人をおもふなりけり

又おとこ

行みつとすぐるよはひとちる花と

いつれまでふことをきくらん

(30オ)

あたくらへかたみにしけるおとこ女のしのひあ

りきしけることなるへし

51 むかしおとこ人のせんきいにきくうへけるに

うへしうへは秋なき時やさかきらむ

花こそあらめねさへかれめや

52 むかしおとこありけり人のもとよりかさりちま

きをこせたりける返ことに

あやめかりきみはぬまにそまとひける

我は野にいてゝかるそわひしき

とてきしをなむやりける

(30ウ)

53 むかしおとこあひかたき女にあひて物かたり

なとするほとにとりのなきければ

いかてかは鳥のなからむ人しれす

おもふ心はまたよふかきに

54 むかしおとこつれなかりける女にいひやりける

ゆきやらぬゆめちをたとるたもとには

あまつ空なるつゆやをくらむ

55 むかしおとこ思ひかけたる女のえうましう

なりてのよに

おもはずのありもすらめとことこの葉の

(31オ)

をりふしことにたのまるゝかな

56 むかしおとこふしておもひおきておもひ思ひ

あまりて

わか袖は草のいほりにあらねとも

くるればつゆのやとりなりけり

57 むかしおとこ人しれぬ物思ひけりつれなき

人のもとに

こひわひぬあまのかるもにやとるてふ

我から身をもくたきつるかな

58 むかし心つきていろこのみなるおとこなかをか

といふ所にいゑつくりておりけりそこのとなり

なりける宮(恒十 生字内)はらにこともなき女どものみなか

なりければ田からむとてこのおとこのあるをみ

ていみしのすぎものゝしわざやとてあつまりて

いりきければこのおとこにけておくにかくれに

ければ女

あれにけりあはれいく世のやとなれや

すみけむ人のをとつれもせぬ

といひてこの宮にあつまりきぬてありければ

おとこ

むくからおひてあれたるやとのうれたきは

(31ウ)

かりにもおにのすたくなりけり

とてなむいたしたりけるこの女ともほひろは

むといひければ

うちわひておちほひろふときかませは

われもたつらにゆかましものを

59 むかしおとこ京をいかゝおもひけむひんかし山

にすまむとおもひりて

すみわひぬいまはかきりと山ざとに

身をかくすへきやともとめてむ

(32ウ)

かくて物いたくやみてしにいたりたりければおも

てに水そゝきなとしていきいてゝ

わかうへにつゆそをくなるあまのかは

とわたるふねのかいのしつくか

60 昔おとこ有けり宮つかへいそかくし心もまめ

ならさりけるほといのいへとうしまめにおもはむ

といふ人につきて人のくへいにけりこのおとこ

宇佐のつかひにていきけるにあるくにのしそり

の官人のめにてなむあるときゝて女あるしにかはら

けとらせよさらすばのましといひければかはら

(32オ)

(33オ)

けとりていたしたりけるにさかなゝりける
たちはなをとりて

さ月まつ花たちはなのかをかけは
むかしの人の袖のかそする

といひけるにそ思ひいてゝあまになりて山に
いりてそありける

61 むかしおとこつくしまていきたりけるにこれはい
ろこのむといふすぎ物とすたれのうちなる人の
いひけるをきゝて

そめかはをわたらむ人のいかてかは

いろになるてふことのならむ

女返し

名にしおママゝあたにそあるへきたはれしま

なみのぬれきぬきるといふなり

62 むかしとしころをとつれさりける女心かしこく
やあらさりけむはかなき人のことにつきて人の
くになりける人につかはれてもとみしひとのまへに
いてきて物くはせなとしけりよさりこのあり
つる人たまへとあるしにいひければをこせた
りけりおとこわれをはしるやとて

(33ウ)

いにしへのにほひやはいつらさくらはな

こけるからともなりにけるかな

といふをいとはつかしと思ひていらへもせてる
たるをなといらへもせぬといへはなみたのこほるゝ
にめも見えず物もいはれすといふ

これやこの我にあふみをのかれつゝ

年月ふれとまさりかほなみきイ

といひてきぬゝきてとらせけれとすてゝにけに

けりいづちいぬらむともしらす

63 むかし世心つける女(名少)いかて心なさけあらむ

(34ウ)

男にあひえてしかなとおもへといひいてむも

たよりなさにもことならぬゆめかたりをす(頭関)

三人をよひてかたりけりふたりのこはなさ

けなくいらへてやみぬさふらふなりける子なむ

よき御おとこそいてこむとあはするにこの女

気しきいとよしこと人はいとなさけなしいかて

この在五中將にあはせてしかなと思ふ心あり

かりしありきけるにいきあひて道にてむま

のくちをとりてかうゝなむ思ふといひければ

(34オ)

あはれかりてきてねにけりさてのちおとこみ

(35オ)

えさりければ女おとこのいゑにいきてかいまみ
けるを男ほのかにみて

もゝとせにひとゝせたらぬつくもかみ

われをこふらしおもかけに見ゆ

とていてたつ気しきを見てむはらからたち

にかゝりていゑにきてうちふせりおとこかの女

のせしやうにしのひてたてりてみれば女なけ

きてぬとて

小狭席に衣かたしきこよひもや

恋しき人にあはてのみねむ

(35ウ)

とよみけるをおとこあはれと思ひてそのよは

ねにけり世中のれいとして思ふをはおもひ

思はぬをは思はぬものをこの人は思ふをも

おもはぬをもけちめみぬ心なんありける

64 むかしおとこ女みそかにかたらふわさもせざり

ければいつくなりけむあやしさによめる

吹風にわか身をなさは玉すたれ

ひまもとめつゝゐるへきものを

返し

とりとめぬ風にはありとも玉すたれ

(36オ)

たかゆるさはかひまもとむへき

65 むかしおほやけおほしてつかうたまふ女のい

ろゆるされたるありけりおほみやすん所とてい

ますかりけりいとこなりけり殿上にさふら

ひけるありはらなりける男のまたいとわかゝ

りけるをこの女あひしりたりけりおとこ女かた

ゆるされたりければ女のある所にきてむかひ

をりければ女いとかたはなり身もほろひなむか

くなせそといひければ
おもふにはしのふることそまけにける

(36ウ)

あふにしかへはさもあらはあれ

といひてさうしにおりたまへればれいのこのみ

さうしには人のみるをもしらてのほりぬければ

この女おもひわひて里へゆくされはなにのよき

事と思ひていきかよひければみな人きゝてわ

らひけりつとめてとのもつかさのみるにくつ

はとりておくになけいれてのほりぬかたかたはに

しつゝありわたるに身もいたつらになりぬへけ

れはつゝにほろひぬへしとてこのおとこいかに
せんわかかゝる心やめたまへとほとけ神にも申

(37オ)

けれといやまさりにのみおほえつゝなをわり
なく恋しうのみおほえければおむやうしかむ
なきよひて恋せしといふはらへのくしてなむ
いきけるはらへけるまゝにいとかなしきことかす
まさりてありしよりけにこひしくのみおほえ
ければ

恋せしとみたらし河にせしみそき

神はうけすも成にける哉

といひてなむいにける

このみかとはかほかたちよくおはしましてほ

(37ウ)

とけの御名を御心に入れて御こゑはいとたう
とくて申たまふをきゝて女はいたりなきけり
かゝるきみにつかうまつらてすくせつたなくか
なしきことこのおとこにほたされてとてなんなき
けるかゝるほとにみかときこしめしつけてこの
おとこをはなかしつかはしてそれはこの女の
いとこのみやす所女をはまかてさせてくらにこ
めてしほり給ふければくらにこもりてなく

あまのかるもにすむゝしのわれからと
ねをこそなかめ世をはうらみし

(38オ)

となきをればこのおとこは人のくにより夜こと

にきつゝふえをいとおもしろくふきてこゑは

おかしうてそあはれにうたひけるかゝればこの

女はくらにこもりなからそれにそあなるとは

きけとあひみるへきにもあらてなむ有ける

さりともとおもふらむこそかなしけれ

あるにもあらぬ身をしらすして

とおもひをりおとこは女しあはねはかくしあり

きつゝ人のくにゝありきてかくうたふ

いたつらにゆきてはきぬるものゆへに

(38ウ)

見まくほしさにいさなはれつゝ

水のおの御時なるへしおほみやすん所もそめと

のゝきさきなり五条のきさきとも申

清和天皇鷹犬之遊漁獵之如未嘗留意風姿甚端嚴如神性 (神) (行)

66 〆(守) (敏行) かしおとこ津のくにゝしる所ありけるにあにお

とゝともたちひきてゐてなにはの方にいきけり

なきさを見れば舟とものあるをみて

なにはつをけさこそみつものうらことに

これやこの世をうみわたる舟
これをあはれかりて人々かへりにけり

67昔男せうえうしにおもふとちかいつらねていつ

(39オ)

みのくにへきさらき許にいきけりかうちのくに
いこまの山を見ればくもりみはれみたちある
雲やますあしたよりくもりてひるはれたり雪
いとしろう木のすゑにふりたりそれを見
てかのゆく人の中にたゝひとりよみける

昨日けふ雲のたちまひかくろふは

花のはやしをうしとなりけり

68むかしおとこいつみのくにへいきけりすみよしの

こほりすみよしのさとすみよしのはまをゆ
くにいとおもしろければおりあつゝゆくある人

(39ウ)

すみよしのはまとよめといふ

鴈なきて菊のはなさく秋はあれと

はるのうみへにすみよしのはま

とよめりければみな人々よますなりにけり

69昔おとこ有けりそのおとこ伊勢のくにゝかり

のつかひにいきけるにかのいせの齋宮なりける
(貞十七五二出恵)
人のおやつねのつかひよりはこの人よくいたはれと

いひやれりければおやのことなりければいとねむ
ころにいたはりあしたにはかりにいたしたてゝ
やりゆふさはかへりつゝそこにこさせけりかく

(40オ)

てねんころにいたつきけり二日といふ夜おとこ
われてあはむといふ女もはたいとあはしとも思
へらすされと人めしけゝればえあはずつかひさね
とあるひとなればとをくもやとさす女のねや
もちかくありければ女ひとをしつめてねひと
つ許に男のもとにきたりけりおとこはたね
られさりければとのかたを見いたしてふせるに
月のおほろなるにちひさきわらはをさき
にたてゝ人たてりおとこうれしくてわかぬると
ころにゐていりぬねひとつよりうらみつまで

(40ウ)

あるにまたなにこともかたらはぬにかへりにけり
おとこいとかなしくてねすなりにけりつとめて
いふかしけれとわか人をやるへきにしあらね
はいと心もとなくてまぢをればあけはなれて
しはしあるに女のもとよりことはゝなくて
きみやこしわれやゆきけむおもほえず
夢かうつゝかねてかさめてか

おとこいといたうなきてよめる

かきくらす心のやみにまとひにき

夢うつとは(二疏よひ)こよひさためよ

(41オ)

とよみてやりてかりにいてぬ野にありけと心は空

にてこよひたに人しつめていとくあはむとお

もふにくにかみいつきの宮のかみかけたる

かりのつかひありときてよひとよさけのみし

ければもはらあひこともえせてあけはおはりの

くにへたちなんとすればおとこも人しれすちの

涙をなかせとえあはす夜やうあけなんと

するほどに女かたよりいたすさかつきのさらに

うたをかきていたしたりとりて見れば

かち人のわたれとぬれぬえにしあれば

(41ウ)

とかきてすゑはなしそのさか月のさらについ

まつすみしてうたのすゑをかきつく

又あふさかのせきもこえなむ

とてあくれはおはりのくにへこえにけり齋宮は

水のおの御時文徳天皇の御女これたかのみ

このいもうと

70 むかしおとこかりのつかひよりかへりきけるに

おほよとのわたりにやとりていつきの宮のわ

らはへにいひかけゝる

みるめかるかたやいつこそさおさして

(42オ)

われにをしへよあまのつり舟

71 むかし男伊勢の齋宮に内の御つかひにてまいれ

りければかの宮にすぎこといひける女わた

くし事にて

(拾遺三) ちはやふる神のいかきもこえぬへし

(八九巻) 大宮人の見まくほしさに

おとこ

こひしくはきても見よかしちはやふる

神のいさむる道ならなくに

72 むかしおとこ伊勢のくになりける女又えあはて

となりのくにへいくとていみしうらみければ女

おほよとの松はつらくもあらなくに

うらみでのみもかへる浪かな

73 昔そこにはありときけとせうそをたに

いふへくもあらぬ女のあたりを思ひける

めにはみててにはとられぬ月のうちの
かつらのことき君にそありける
74むかしおとこ女をいたうららみて
いはねふみかさなる山はへたてねと
あはぬ日おほくこひわたるかな

(43オ)

75むかしおとこ伊勢のくにゝゐていきてあらん
といひければ女
おほよとのほまにおふてふみるからに
心はなきぬかたらはねとも

といひてましてつれなかりければおとこ
袖ぬれてあまのかりほすわたつうみの
みるをあふにてやまむとやする

女

いはまよりおふるみるめしつれなくは
しほひしほみちかひもありなむ

(43ウ)

又おとこ

涙にそぬれつゝしほる世の人の

つらき心はそでのしつくか

世にあふことかたき女になむ

76むかし二条のきさききまた春宮のみやすん

所と申ける時氏神にまうて給けるにこの多(貞三三)
つかさにさふらひけるおきな人々のろく給はる
ついでに御車より給はりてよみてたてまつりける
おほはらやをしほの山もけふこそは
神世のこともおもひいつらぬ

(44オ)

とて心にもかなしとやおもひけむいかゝおもひ
けむしらすかし

77むかし田(文)むらのみかとゝ申すみかとおはしまし
藤原多賀幾子(貴子)從四位下右大臣良相女

けりその時の女御たかきこと申すみまそかり
けりそれうせ給て安祥寺にてみわさしけり(貞三三)
人々さゝけものたてまつりけりたてまつりあつめ

たる物ちさゝけはかりありそこはくのさゝけ物
を木のえたにつけてたうのまへにたてたれば

山もさらにたうのまへにう(御元)こきいてたるやうに
なむみえけるそれを右大将にいまそかりけるふち

(44ウ)

はらのつねゆきと申すいまそかりてかうのをはる
ほとにうたよむ人々をめしあつめてけふのみわさを
題にて春の心はへあるうたてまつらせ給右の

貞観六年正月十六日參議八年十二月十六日右大将卅

むまのかみなりけるおきなめはたかひなからよみける
義平貞観七年三月任右馬頭天安女御法事如何若後追善歌

山のみなうつりてけふにあふことは
はるのわかれをとふとなるへし

とよみたりけるをいま見ればよくもあらざりけり
そのかみはこれやまさりけむあはれかりけり

78 むかしたかきこと申す女御おはしましけりうせ

給てななぬかのみわさ安祥寺にてしけり

(45オ)

右大将ふちはらのつねゆきといふ人いまそかりけり

そのみわさにまうて給ひてかへさに山しなのせん

人康親王仁明第四品強正尹貞觀元年五月入道同十四年薨四十二号山科宮

しのみこおはしますその山しなの宮にたき

おとし水はしらせなとしておもしろくつくられ

たるにまうてたまうてとしころよそにはつか

うまつれとちかくはいまたつかうまつらすこよひは

こゝにさふらはむと申たまふみこよろこひたまう

てよるのおましのまうけさせ給ふさるにかの大

将いてゝたはかりたまふやう宮つかへのはしめ

にたゝなをやはあるへき三条のおほみゆきせし

時きのくにの千里のはまにありけるとおもしる

きいたてまつれりきおほみゆきのうちたて

まつれりしかはある人のみさうしのまへのみそに

すへたりしをしまこのみたまふきみなりこのい

しをたてまつらむとのたまひてみすいしんとねりし

てとりにつかはすいはくもなくともてきぬこのいし

きしよりはみるはまされりこれをたゝにたて

まつらはすゝろなるへしとて人々にうたよませ

給ふみきのむまのかみなりける人のをなむあを

きこけをきさみてまき急のかたにこのうたを

つけてたてまつりける

あかねともいはにそかふる色みえぬ

ころを見せむよしのなけれは

となむよめりける

79 むかしうちのなかにみこうまれたまへりけり御

うふやに人々うたよみけり御おほちかたなりける

おきなよめる

わかゝとにちひろあるかけをうへつれば

なつふゆたれかかくれさるへき

これはさたかすのみこ時の人中將のことなん

いひけるあにの中納言ゆきひらのむすめのはら也

(46ウ)

80 むかしおとろへたるいへにふちのはなりへたる人

ありけりやよひのつこもりにその日雨そほふる
に人のもとへおりてたてまつらすとてよめる

ぬれつゝそしめておりつる年の内に

はるはいくかもあらしとおもへは 元大納言五十一

源融隆殿第十二源氏母正五位下大原金子仁和三四年八廿五左大臣
貞観十四年八廿五左大臣
元徳第一母從五位上紀幹子名虎女四品号 小野宮
號七十三

81 むかし左のおほいまうちきみいまそかりけりかもか
はのほとりに六条わたりに家をいとおもしろくつ
くりてすみたまひけり神な月のつこもりかた菊

(47オ)

の花うつろひさかりなるにもみちのちくさにみゆ

るおりみこたちおはしまさせて夜ひとよさけ

のみしあそひて夜あけもてゆくほとにこのと

のゝおもしろきをほむるうたよむそこにありける

かたみおきないたしきのしたにはひありきて

人にみなよませはてよめる

しほかまにいつかきにけむあさなきに

つりする舟はこゝによらなむ

となむよみけるみちのくにゝいきたりけるにあ

やしくおもしろきところゝおほかりけり

(47ウ)

わかみかと六十よこくの中にしほかまといふ所に

にたる所なかりけりされはなむかのおきなさら
にこゝをめてしほかまにいつかきにけむとよめりける

82 むかしこれたかのみこと申みこおはしましけり山さ

きのあなたにみなせといふ所に宮ありけりとし

ことのさくらの花さかりにはその宮へなむおはし

ましけるその時みきのむまのかみなりける人をつ

ねにゐておはしましけり時よへてひさしくなりに

ければその人の名わすれにけりかりはねむころ

にもせてさけをのみつゝやまとりたにかゝれり

(48オ)

けりいまかりするかたのゝなきさのいへそのあんの

さくらことにおもしろくその木のもとにおりゐて

えたをおりてかさしにさしてかみなかしもみな

うたよみけりうまのかみなりける人のよめる

世中にたえてさくらのなかりせば

春のこゝろはのとけからまし

となむよみたりける又人のうた

ちればこそいとゝさくらはめてたけれ

うき世になにかひさしかるへき

とてその木のもととはたちてかへるに日くれに

(48ウ)

なりぬ御ともなる人さけをもたせて野よりいて

きたりこのさけをのみてむとてよき所をもと

めゆくにあまのかはといふ所にいたりぬみこにむ

まのかみおほみきまいるみこのたまひけるかた

のをかりてあまのかはのほとりにいたるを題にてう

たよみてさかつきはさせとのたまふければかの

むまのかみよみてたてまつりける

かりくらししたなはたつめにやとからむ

あまのかはらにわれはきにけり

みこ歌を返すしたまうて返しえたま

(49オ)

はすきのありつね御ともにつかうまつれりそ

れか返し

ひととせにひとたひきますきみまでは

やとかす人もあらしとそおもふ

かへりて宮にいらせたまひぬ夜ふくるまでさけのみ

物かたりしてあるしのみこ多ひていり給なむとす十一

日の月もかくれなむとすればかのむまのかみのよめる

あかなくにまたきも月のかくるゝか

山のはにけていれすもあらなむ

みこにかはりたてまつりてきのありつね

をしなへてみねもたひらになりなむ

山のはなくは月もいらしを

83 むかしみなせにかよひ給ひしこれたかのみこれい

のかりしにおはしますともにもうまのかみなるおき

なつかうまつれり日ころへて宮にかへり給うけり

御をくりしてとくいなむと思におほみき給ひろ

くたまはむとてつかはさゝりけりこのむまの

かみ心もとなかりて

まくらとてくさひきむすふこともせし

秋の夜とたにたのまれなくに

(50オ)

とよみける時はやよひのつこもりなりけりみこ

おほとこのこもらてあかし給うてけりかくしつゝ

まうてつかうまつりけるをおもひのほかに

御くしおろしたまうてけりむ月におかみたて

まつらむとてをのにまうてたるにひえの山の

ふもとなれば雪いとたかししゐてみむろに

まうてゝおかみたてまつるにつれゝといともの

かなしくておはしましければやゝひさしくさ

ふらひていにしへの事なと思ひいてゝきこえ

けりさてもさふらひてしかなとおもへとおほ(頭中)

〔50ウ〕

やけことゝもありければえさふらはてゆぶくれ
にかへるとて

わすれてはゆめかと思ふおもひきや

雪ふみわけて君をみむとは

とてなむなく／＼きにける

84 むかしおとこありけり身はいやしなからは、

なむ宮※2なりけるそのはななかをかといふ所にすみ

給けり子は京に宮つかへしければまうつとし

けれとしは／＼えまうてすひとつこにさへあり

けれはいとかなしうしたまひけるさるにしはす

はかりにとみのことゝて御ふみありおとろきてみ

れはうたあり(貞三)〔51オ〕

おいぬれはさらぬわかれのありといへは

いよ／＼見まくほしききみかな

かの子いたうちなきてよめる

世中にさらぬわかれのなくもかな

千世もといのる人のこのため

85 むかしおとこありけりわらはよりつかうまつりける

きみ御くしおろし給うてけりむ月にはかならず

まうてけりおほやけの宮つかへしければつね

にはえまうてすされともとの心うしなはてま

うてけるになんありけるむかしつかうまつり

人そくなるせんしなるあまたまいりあつまり

てむ月なれはことたつておほみきたまひけり

ゆきこほすかことふりてひねもすにやます

みな人ゑひて雪にふりこめられたりといふを題

〔51ウ〕

にてうたありけり

おもへとも身をしわけねはめかれせぬ

ゆきのつもるそわか心なる

とよめりければみこいといたうあはれかり給て

御そぬきてたてまつりけり

86 むかしいとわかき男女有をあひいへりけりをの／＼

おやありければつゝみていひさしてやみにけり

としころへて女のもとに猶心さしはたさむとや

おもひけむおとこうたをよみてやれりける

今まてにわすれぬ人は世にもあらし

をのかさま／＼としのへぬれは

〔52オ〕

とてやみにけりおとこも女もあひはなれぬ宮
つかへになむいてける

87 昔男つづくにむはらのこほりあしやのさと

(52ウ)

にしるよししていきてすみけりむかしのうたに

(万葉)
あしのやのなたのしほやきいとまなみ

つけのをくしもさゝすきにけり

とよみけるそのさとをよみけるこゝをなむ

あしやのなたとはいひけるこのおとこなま宮つ

かへしければそれをたよりにてゑふのすけ

ともあつまりきにけりこのおとこのこのかみも

ゑふのかみなりけりそのいへのまへの海のほとり

にあそひありきていざこの山のかみにありと

いふぬのひきのたきみにのほらむといひてのほ

(53オ)

りてみるにそのたきものよりことなりなかさ

二十丈ひろさ五丈はかりなるいしのおもてにし

らきぬにいはをつゝめらむやうになむありける

さるたきのかみにわらうたのおほきさして

さしいてたるいしありそのうへにはしりかゝ

る水はせうかうしくりのおほきさにてこほれお

つそこなる人にみなたきのうたよますかのゑふ
のかみまつよむ

わか世をはけふかあすかとまつかひの

涙のたきといつれたかけん

(53ウ)

あるしつきによむ

ぬきみたる人こそあるらししら玉の

まなくもちるかそてのせはきに

とよめりければかたへの人わらふことにやあ

りけんこのうたにめてゝやみにけりかへりくる

みちとをくてうせにし宮内卿もちよし家

のまへくるに日くれぬやとりのかたを見やれば

あまのいさりする火おほく見ゆるにかのある

しのおとこよむ
はるゝ夜のほしか河辺のほたるかも

(54オ)

わかすむ方にあまのたく火か

とよみて家にかへりきぬその夜みなみのかせ

ふきてなみいとたかしつとめてその家のめの

こともいてゝうきみるの浪によせられたるひろ

ひていへのうちにもてきぬ女かたよりそのみるを

たかつきにもりてかしはをおほひていたし

たるかしはにかけり

わたつりみのかさしにさすといはふもゝ

きみかためにはおしまさりけり

ゐなか人のうたにてもあまれりやたらすや

(54ウ)

※1

『伊勢物語校本と研究』（山田清市、桜楓社）による
と鉄心斎文庫蔵源通具本では「かたゐなかさみけり」の
朱注に（有常女撰津国六原ノ郡に住也）とある。原本で
は「かたゐなか」の説明として撰津国六原ノ郡の「撰」
と「六」の字だけを書いたのではないかと思われる。

※2

「登」の冠部分「~~マ~~」を削り消したような跡がある。
もとは他の諸本同様「登」であったか？